

視点3 内容項目名・家族愛
資料名 「おんぶしてくれ」

(内容項目番号4－(3))

(「柏のむかしばなし」 柏市教育委員会)

1 学習指導案

小学校 低学年 道徳学習指導案

(1) 主題名

家族のあたたかさ

(2) ねらい

父母などの温かい心を知り、感謝の念や親愛の心を持ち、家族のために自分ができることを進んで行おうとする心情を育てる。

(3) 主題設定の理由

本主題は、学習指導要領の内容4「主として集団や社会とのかかわりに関すること」の(3)「父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。」を中心価値としている。

家族の中で児童は育まれる。そして家族とは、子どもにとって最も安心できる、そして、心和む場である。ここで、家族の温かさや、優しい心づかいを意識させ、深い愛情を注がれていることを感じさせたい。そして、ふだん何気なく過ごしている家族のぬくもりを感じ、感謝の気持ちを持たせたい。感謝の気持ちや親愛の情が強くなることで、家族の一員として進んで手伝いをするなど、家族を喜ばせたいという気持ちにつながっていく。そして、「家族の役に立つ喜び」から、協力し合って楽しい家庭を作ろうとする積極的な気持ちにつながっていくと考える。

また、東日本大震災により、「いのち」や「家族」とは、かけがえのないものであることを再認識するきっかけとなった。今こそ、心の根底にある家族の絆や家族の支え合いの大切さに気付く良い機会だと思い、本主題を設定した。

(4) 展開

	学習活動と主な発問	予想される反応	教師の支援
導入 5分	1 「家族っていいなあ」と感じるのはどんな時ですか。	・一緒にご飯を食べている時 ・一緒に出かける時 ・遊んでくれる時	・子どもの素直な気持ちを出させる。 ・アンケートの結果を参考にして指名する。
展開 35分	2 資料「おんぶしてくれ」を読んで話し合う。 ・いつもおっかさんの背中におぶさっているおもを見てむじなは、どんなことを思っていたでしょう。	・気持ちよさそうだなあ ・おもはいいなあ ・おんぶしてもらいたいなあ ・お母さんがいていいなあ	・むじなの紹介をしてから読む。 ・うらやましく思う(親のぬくもりが欲しい)むじなの気持ちを考えさせる。

	<ul style="list-style-type: none"> ・「おものおっかあー。」と甘ったれ声を出して逃げていくとき、むじなは心の中でどんなことを思っていたのでしょうか。 <p>○おっかさんにおんぶしてもらって、眠ってみたむじなの子は、どんな気持ちになったでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎朝、栗などを置いていくときのむじなのお気持ちを書いてみましょう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・おものように甘えたいなあ ・おっかさんの背中はお気持ちよかったなあ ・もっとおんぶしたいなあ <ul style="list-style-type: none"> ・気持ちいいな ・うれしいな ・おっかさんはやさしいな ・おっかさんありがとう <ul style="list-style-type: none"> ・ありがとう ・お礼に食べてください ・おっかあのこと忘れないよ ・家族だと思っているよ 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分も甘えておんぶしてみたいが、言えずに、おぶさって逃げていく気持ちを考えさせる。 <ul style="list-style-type: none"> ・劇にして考える。(おっかさん役は担任) ・感謝の気持ちを持ったことに気付かせる。 <ul style="list-style-type: none"> ・自分にできることを進んで行い、感謝の気持ちを表していることを感じ取らせる。 ・お面をつけて発表する。
終末 (5)	3 教師の話を書く。		<ul style="list-style-type: none"> ・心に残る話を紹介する。(子どもの頃の思い出、母への思いなど)

(5) 他の教育活動との関連

国語 「うみへのながいたび」 母ぐまが子ぐまを守り励ましながら長い道のり歩いて行き海にたどりつく物語を通して、家族の絆について話し合う。

生活科 「家庭と生活」 家庭生活を支えている家族について、改めて見つめたり、尋ねたり、実際に手伝いをしたりする。(家庭での自分の生活を振り返る。)

2 本事例の活用に関する留意点

(1) 資料について

アンケートをとったところ、多くの児童が「おんぶ」や「だっこ」といったスキンシップを今でも経験している。一方、兄弟関係や家族の事情などで、経験していない児童もいる。そこで、事前に体験する機会を作り、「おも」や「むじな」の気持ちに共感できるよう配慮したい。

クラスの児童は様々な家庭事情の中で生活している。しかし、それぞれの家族の人たちに深い愛情があることには変わらない。だからこそ、それぞれの家族の人の温かい心に気付かせて、感謝の気持ちを持たせ、家族の一員として役に立とうとする気持ちにつなげていきたい。

(2) 展開について

資料は児童の手元に置かず、紙芝居を活用して視覚への訴えや理解しやすい効果をねらった。

(3) 終末について

終末には、教師の説話として、子どもの頃、母に作ってもらった着物を持参し、母の思い出と今でもその着物を大事にしていることを語ることで母を大事に想う気持ちを伝えるようにした。

3 道徳教材（素材について）

対 象	小学校低学年
主 題 名	家族のあたたかさ
ね ら い	父母などの温かい心を知り、感謝の念や親愛の心を持ち、家族のために自分ができることを進んで行おうとする心情を育てる。
学 習 活 動	<ul style="list-style-type: none">○ 導入で「家族っていいなあ」と感じるのはどんな時かを想起させた後、資料「おんぶしてくれ」を読んで話し合う。○ 補助発問として、「いつもおっかさんの背中に おぶさっているおもを見てむじなは、どんなことを思っていたでしょう。」と問いかけ、親のぬくもりや愛情がほしいむじなの気持ちを考えさせる。○ 中心発問を「おっかさんにおんぶしてもらって、眠って見たむじなの子は、どんな気持ちになったでしょう。」として、担任がおっかさん役、児童がむじな役となり、役割演技を通し、家族のぬくもり（愛情）に気付かせる。毎朝、栗などを置いて行くときのむじなの気持ちについて、ワークシートに書く。○ 終末は、教師の母親に対する思いを語る。
<p>【素 材】</p> <p>『鷲山のむじな』 「柏のむかしばなし」より</p> <p>むかし、むかし、増尾村に「鷲山」という所がありました。ぶなや、ならや、しいの木が茂り、たぬきやきつねの住む穴が、あちこちにありました。野うさぎが走り回り、秋になると、落ち葉の間にどんぐりの実がばらまかれたように落ちていました。</p> <p>そこに、一軒の古びた山小屋がありました。おもという女の子と母親が二人で住んでいました。</p> <p>ある日、母親が夕ごはんのしたくをしていると、だれかが、</p> <p>「おっかあー。おものおっかあ。」</p> <p>とよびます。はてさて、だれがよぶのじゃろうと、おっかあが立ち上がろうとしたところ、背中が急に重くなりました。</p> <p>ふり返ると、なんと、いたずらそうな目をしたむじなが、背中におぶさっていました。おっかあが、おどろいているうちに、いつの間にかむじなは、逃げて行ってしまいました。</p> <p>それから、二、三日後、おっかあが、小屋のまわりでたき木を拾っていると、</p> <p>「おっかあ。おものおっかあ。」</p> <p>という声がします。</p>	

「また来たな。このいたずらむじなめ。」
と思っているうちに背中が重くなり、この前のむじなが背中におぶさっていました。
こういことが、その後何回か続きました。
そこで、ある日、おっかあは、
「どうして、そんなに、わしの背中におぶさってくるのかい。」
とむじなにたずねました。
「だって、おっかあの背中、とってもあったかいんだもの。おっかあのあったかい背中ですやすやすねむっているおものように、一度でよいから、おぶさってみたかったからさ。」
とむじなは、しみりと答えました。
今まで、いたずらむじなと思いついていたおっかあは、むじなが急にかわいらしく思えてきて、
「それじゃ、わしの背中でゆっくりねむりな。」
とむじなに背を向けました。
そこでむじなは、あったかいおっかあの背におぶさって、気持ちよくねむりました。
しばらくたって、目をさましたむじなは、
「おっかあ、きょうは、どうもありがとう。この親切はぜったい忘れないよ。」
と言って帰っていきました。
それからというもの、おっかあとおもの家には、春になるとたけのこやわらびが、そして秋には、まつたけやくりが、そっと置かれていくようになりました。おっかあは、
「あのむじなが、お礼にもってきたんだな。」
と腰をさすりながら、つぶやいていました。

視点3 内容項目名・生命尊重 (内容項目番号 3-(1))

資料名 「はるかのひまわり」

(出典 日本標準「みんなで考える道徳」4年)

1 学習指導案

小学校 中学年 道徳学習指導案

(1) 主題名

命の大切さ

(2) ねらい

災害にあった人々の思いや残された人々の思いを感じ、自他の生命を大切にし、精一杯生きていこうとする意欲と態度を養う。

(3) 主題設定の理由

第3学年、及び第4学年の指導内容3-(1)は、「生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にする」をねらいとしている。この時期の児童は、現実性を持って死を理解できるようになる。3月11日の東日本大震災を経験し、子ども達は生命の大切さや家族をはじめ人の温かさを強く感じる事ができた。生命はたった一つであり、限りがある。毎日のように報道される大震災のニュースは、これまで生きていたことを当たり前のことととらえていた子ども達に、生命の重さ、生命の唯一性、有限性を実感させたに違いない。

しかし、いつまでも過去の悲しみにとらわれていては前に進むことはできない。このような時期だからこそ、家族を失った悲しみと共に、悲しみを乗り越えて精一杯生きることのすばらしさについて児童に感じ取らせていきたい。そして、生命を大切にすることは、「せいっぱい生きること」であることに気付かせ、一日一日を大切に希望に向かって力強く生きようとする気持ちを育てていきたいと考え、本主題を設定した。

(4) 展開

	学習活動と主な発問	予想される反応	教師の支援
導入 7分	1 東日本大震災の被害の大きさを確認し、被災者の気持ちを想像する。 2 16年前の「阪神淡路大震災」について知る。	・大きな津波がきて、多くの人がなくなった。 ・家族を亡くした人は悲しい思いをしている。	○震災の新聞記事を提示し、被害の大きさを思い出させる。 ○阪神淡路大震災の被害がわかる写真を示す。
展開 33分	3 「はるかのひまわり」を読み、いつかの気持ちを中心に考え、話し合う。 ○いつかさんはどうして「もういやや。地震もはるかの思い出も、ひまわりもいや。なんもかもはこにつめて、海の底へしずめてしまいたい」と思ったのだろうか。	・妹はもう帰ってこない。 ・地震も妹・はるかのことも、悲しいことはみんな忘れてしまいたい。 ・妹のことを思い出すひまわりなんか見たくない。	○妹を亡くした姉のつらい気持ちに十分共感させる。

	<p>○いつかさんは、どうして全国の小中学生に地震の体験を話すようになったのだろう。</p> <p>○講演の最後にひまわりの種を配る時、いつかさんは何を伝えようとしているのだろう。</p> <p>4 東日本大震災の被災地にも「はるかのひまわり」7万粒の種が送られていることを知る。 ○「はるかのひまわり」の種には、どんな思いが込められているのだろう。</p> <p>5 「はるかのひまわり」の種をうけとり、今感じていることを中心にいつかさんへの手紙を書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・つらいのは、自分だけじゃなかったと気付いた。 ・地震の後たくさんの人が私たちを支えてくれたことに気付いた。 ・今、自分にできることをするのが、「生きる意味」だと思ったから。 ・ひまわりを見て、みんなに元気になってほしい。 ・いつ何が起こるかかわからない。みんな命を大切にしてほしい。 <ul style="list-style-type: none"> ・ひまわりの花を見て被災地の人に元気になってほしい。 ・「みんなが東北の人々の復興を支えていくよ」というメッセージを送りたい。 	<p>○町の復興に、たくさんの人々の応援があったことを補足する。(NPOの活動等)</p> <p>○生きることに前向きになったいつかの変化に十分共感させる。</p> <p>○阪神淡路大震災後の定点写真やひまわり畑の写真を提示し、復興させていく人間の力強さに気付かせ、希望を持たせたい。</p> <p>○東北の被災地にも「はるかのひまわり」7万粒の種が送られているという新聞記事を紹介する。</p> <p>○「はるかのひまわり」の種を紹介し、配付する。</p>
<p>終末 5分</p>	<p>6 教師の話聞く</p>		<p>○講演で語るいつかさんの思いを児童に伝える。</p>

2 本事例の活用に関する留意点

(1) 資料について

今回の大震災はあまりに大きな出来事であり、また、いまだに余震が起こっている状況であるため、地震を題材にした資料の扱いは慎重に考えるべきである。児童の様子をよく把握した上で本資料を扱うことが望ましい。

命の大切さを悲しい出来事を通してとらえるだけでなく、周りの人々とふれあい、つながりながら、悲しみを乗り越えて希望を持って、今自分にできることをすることが「命を大切にすること」となると気付かせていくことが大切である。

(2) 授業の指導ポイント

① 導入

16年前にも阪神淡路大震災という大きな地震があったことを知らせ、東日本大震災と結び付けて考えられるようにする。被害の詳細にはふれず、悲しい思いをした人々が数多くいたことを押さえる。

②展開

いつかさんの悲しみや、やりきれない思いに十分共感させることがポイントである。深い悲しみから立ち直るには、多くの人々の温かい心と支えがあったことに気づき、生きることによって希望をもてるようになったいつかさんを通して、自分にとっての「生きる」について考えさせたい。そのためには、「希望の灯り」等、被災した人々を支える様々なNPOの活動があったことを必要に応じて補足することが望ましい。

展開後段では、阪神大震災後の神戸の復興の様子が見える写真を提示し、人々の努力で大きな被害と深い悲しみから立ち直ることができるという希望を持たせた上で、今の自分の心と向き合わせたいと考える。また、東日本大震災の被災地に送られた「はるかのひまわり」の種に込められた多くの人々の温かい思いにふれさせたいと考える。

③終末

広がる「はるかのひまわり」の活動といつかさんの思いを紹介し、余韻を持って終わる。

3 道徳教材（素材について）

対 象	小学校中学年
主 題 名	大切な命
ね ら い	災害にあった人々の思いや残された人々の思いを感じ、自他の生命を大切に、精一杯生きていこうとする意欲と態度を養う。
学 習 活 動	<ul style="list-style-type: none">○ 資料「はるかのひまわり」を読み、阪神淡路大震災で妹を亡くしたいつかさんの悲しみに共感するとともに、全国の小中学校で自身の体験を話せるようにまでなったいつかさんの心の変化について考え、「生きる」ことの意味や希望を持つことの大切さについて気付く。○ 小中学校での講演でいつかさんが子ども達に伝えたいことは何か考える。○ 東日本大震災の被災地に送られた「はるかのひまわり」の種に込められた思いについて考える。
<p>【素 材】 「はるかのひまわり」（日本標準「みんなの道徳 4」）</p> <p>1995年に起こった「阪神淡路大震災」における実話である。</p> <p>夏になると神戸市東灘区では「はるかのひまわり」と呼ばれるひまわりがたくさん咲く。震災の犠牲になった「はるかちゃん」が、かわいがっていたオウムのえさが芽を出して花を咲かせたのだらうと考えた人たちが「はるかのひまわり」と名付け、広めていった。がれきの後に咲いたひまわりは、神戸の人々を励まし、勇気づけた。</p> <p>「阪神淡路大震災」で妹を亡くした「いつかさん」は、その妹を亡くした悲しみの深さから、ひまわりやはるかの思い出から目をそらし、心を閉ざしてしまう。しかし、いつかさんは周りの人とふれあいながら、悲しみを乗り越え、人々とのつながりを感じ、「生きる」ことの意味を見いだし、そして、全国の小中学校で地震の体験談や、「命の大切さ」について子ども達に伝える「はるかのひまわり」の活動を始める。</p>	

視点1 内容項目名・自律・責任（内容項目番号 1－（3））

資料名 東日本大震災のある記事から

（3月17日付けスポーツニッポン新聞より）

1 学習指導案

小学校高学年 道徳学習指導案

（1）主題名

自律・責任

（2）ねらい

東日本大震災の際に車からガソリンを抜き取る人々の新聞記事から、被災地の人々が自ら考え、判断し、行動していることをとらえ、自律的で責任のある行動をする態度を育てる。

（3）主題設定の理由

内容項目1－（3）は、「自由を大切にし、自律的で責任のある行動をする」ことをねらいとしている。自己のよりよい生き方を追求していくには、自由な考えや行動が大切である。しかし、自由は自己中心的な生き方とは区別される。自由な意思によって自ら考え、判断し、実践するという自律的な行動は、自らの判断に対する責任を伴う。

小学校高学年の児童は、活動範囲も広がり、自分の考えに基づいて行動しようとする気持ちが高まる。しかし、自らの判断に対する責任を意識しないで「自由」を主張し、自分勝手なふるまいをすることが見られる。

この度の東日本大震災は、まさに「未曾有」ということばどおりの災害であった。平凡な日常がいかにかつてのことであるのかを、強烈に教えられた。今まで常識であったことが脆くも崩れた。


この授業では、津波で流されて瓦礫の中に横たわる車からガソリンを抜いている人のニュース（写真）を資料として扱うこととする。

壊れて流されてきたとはいえ、他人の物である。平常時であれば許される行為とは言えない。ところが、写真に写る人々は避難所の発電機を動かしたくて、ガソリンを抜いていた。この行為は、許されることなのだろうか。このような事実について授業の中で本音で語り合うことによって、道徳心についての考えも深まっていくのである。

この写真及び新聞記事を資料として、自ら考え、判断し、実行するという自律的で責任ある行動をする態度を育てたいと考え、本主題を設定した。

（4）展開

	学習活動と主な発問	予想される反応	教師の支援
導入 5分	1 道に乗り捨てられている自転車の写真を見て話し合う。 ○この写真は何をしているところですか。	・人の物を盗んで悪い。 ・許せない。	・乗り捨てられている自転車を見た体験を想起させ、児童の正義感を引き出す。 ・自転車を盗まれた経験のある児童がいたら、その体験を語らせ、被害者の哀しみを強調する。

<p>展開 30分</p>	<p>2 今日の学習では東日本大震災の際に人々はどのように考え、どのように行動したかについて考えることを確認する。</p>		
<p>東日本大震災の際に人々はどのように考え、どのように行動したかを考えよう。</p>			
	<p>3 被災地でガソリンを盗っている人々の写真を見て、話し合う。 ○この写真は横転している車からガソリンを抜き取っています。この写真を見て、どんなことを考えますか。</p>  <p>4 写真の記事を読み、立場を決めて話し合う。 ○新聞記事を範読する。 ○車からガソリンを抜き取ることをあなたはどのように考えますか。 ○自転車の盗みと避難所のための盗みは、何が違うのでしょうか。 ○同じ境遇にあったらどうしますか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ガソリンを泥棒するのは酷い。 ・誰の車か分からなくても盗むのは悪い。 ・地震につけ込むのは許せない。 <p>A：人のためなので正義の行為だ。 B：どんな場合も盗むのは悪だ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二人対話・三人対話というように小集団からの対話からはじめ、全体の話し合いへと広げていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもは放置自転車の話し合いから、この写真の行為を一方的に非難する意見が続くだろう。子どもの写真に対する思いを十分引き出す。 ・震災に伴うガソリン不足、ガソリン盗難の記事を示し、必要に応じて子どもの思いを強調する。 ・Aの立場をとる児童が多いだろう。指導者は、意図的にBの児童を支援する立場をとることで、話し合いを活性化する。
<p>終末 10分</p>	<p>5 今日の学習を振り返る。 ○自分は避難所にいる人たちに何ができるかを考え、発表する。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・早急に結論は出さない。震災の中でこのように悩む人がいることを忘れずに、今後も考え続けて欲しいことを強調する。

(4) 他の教育活動との関連

東日本大震災に関して語り継ぎ、児童とともに考えていく内容が数多くある。日常の生活場面や児童の体験と結び付けて、道徳の内容項目に沿った資料化に取り組みたい。

2 道徳教材（素材について）

対 象	小学校高学年
主 題 名	自律・責任
ね ら い	東日本大震災の際に車からガソリンを抜き取る人々の新聞記事から、被災地の人々が自ら考え、判断し、行動していることをとらえ、自律的で責任のある行動をする態度を育てる。
学 習 活 動	東日本大震災の際に車からガソリンを抜き取る人々の新聞記事から、被災地の人々の気持ちを考え、自らの立場を決めて話し合い、自律的な行動と責任について考える。
<p>【素 材】</p> <p>甚大な被害を受けた東北地方は16日、真冬並みの寒さに襲われ、被災地には非情な雪が舞った。暖房と移動に必要な燃料不足が深刻化し、被災者はストーブの使用や車の移動も必要最低限に控えている状態で「とにかくガソリンをくれ」と悲痛な声が上がっている。被災から6日目を迎えてなお、約43万人が避難所に身を寄せており、死者・行方不明者は警察庁まとめで約1万2000人に上っている。</p> <p>ライフラインが途絶して孤立が続く宮城県南三陸町歌津地区では、横転した状態で放置された車の前に4、5人の男性が集まり、ポンプでガソリンを抜き取っていた。</p> <p>50歳の男性は「泥棒みたいなことをしたためらいはあるが、子供やお年寄りにつらい思いをさせたくない。命のガソリンだ」とつぶやいた。</p> <p>近隣から物資を集めて避難所へ運んだり、携帯電話が通じない中、遠方にある町の対策本部に状況を伝える際など、車が必要だ。さらに、ガソリンで発電機を動かし、暖を取るためのヒーターをつける。約500人の生活を支えるには1日に約20リットルが使われており、男性らは朝から夕方まで作業をし、ポリタンク5個分（90リットル）を集めた。</p> <p>住民の半数近く約7000人の安否が分かっていない岩手県大槌町では避難所の弓道場で、約500人が毛布にくるまって凍えるような寒さに耐えた。灯油はあと一晩分。節約のため、昼間はストーブをつけておらず、町職員は「とにかく燃料が足りない。次はいつ届くのか」と訴えた。</p> <p>福島第一原発に近い福島県南相馬市では、60代の男性が「できれば山形とか、もっと遠くに逃げたいがガソリンが尽きた」と苦しい胸の内を明かした。福島原発の北50キロにある宮城県山元町では一時吹雪のようになった。車に寝泊まりしている会社員岩佐隆さん（42）はガソリン節約のためエンジンを切り、たき火で暖を取り、「雪に放射能が含まれているかもしれない」と不安そうに空を見上げた。</p> <p>日中の気温が0度だった宮城県仙台市でも50代の男性が「車のヒーターで暖まっていたが、ガソリンがもったいないのでやめた」と車のエンジンを切った。</p> <p>寒さのほかにインフラの不通も厳しい現実を突きつけている。ある被災者は「トイレの水が流れないので大便是みんなビニール袋にして、避難所の近くの土に埋めている。ビニール袋が不足している」と話した。</p> <p style="text-align: right;">（3月17日付けスポーツニッポン新聞より）</p>	

視点4 内容項目 奉仕の精神・公共の福祉と社会の発展 (内容項目番号4-(5))

資料名 「仮設住宅のグリーンカーテン」(自作資料)

1 学習指導案

中学校 道徳学習指導案

(1) 主題名

奉仕の精神

(2) ねらい

奉仕の精神をもって自ら進んでそれを実践しようとする態度を育てる。

(3) 主題設定の理由

本主題は、内容項目4-(5)「勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める」ことをねらいとしている。

東日本大震災を経験し、多くの生徒は何か活動をしたいと思っていたり、実際に募金活動をしたり、あるいは県内外の被災地に赴いてボランティア活動をしている者もいるであろう。それらの気持ちや行動の根底にあるのは、困っている人は放っておけない、互いに助け合って生きてこそ、という温かい人間愛に裏打ちされた気持ちや行動である。今この時に「自分たちにできることは何であるのか。」を生徒に考えさせ、実践しようとする意欲を育てることの意義は大変大きい。更に、その意義や喜びを理解することができたなら、ボランティア活動が一過性のものではなく、継続して行おうとする意欲を高めることにもつながると考え、本主題を設定した。ただし、感謝されることを目的として行われるのではなく、見返りなどを求めず、ただ相手の幸せを願って純粋に行うものであるというボランティア活動の本義についても考えさせることも忘れてはならない視点である。

本資料は、主人公が仮設住宅でのグリーンカーテン作りを通してボランティアの意義に気付いていく姿を描いている。授業の中では、生徒の多様な考えを引き出すために補助発問をしたり、空欄の言葉を考えさせたりすることを重視していきたい。

本資料は、千葉県立旭農業高等学校の生徒が、仮設住宅のグリーンカーテン作りに取り組んだことへのインタビューをもとに、再構成し加筆した。

(4) 展開

	学習活動と主な発問	予想される反応	教師の支援
導入 5分	1 資料に対する方向付けをする。 ・津波によって破壊された飯岡地区の写真を提示する。 ・津波によって家が壊れてしまった人たちはどんな気持ちだろう。	・ショックだったと思う。 ・自分の家がペシャンコになってしまったりし、すごく悲しくなる。 ・これからどう生活していくのか途方にくれる。	・津波の怖さやすごさではなく、そこに生活していた人たちの気持ちを考えさせるようにする。
	2 前半資料を読み、ぼくが参加しようと思った気持ちを話し合う。		

<p>展 開 3 5 分</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・すぐに参加することを伝えた時、ぼくはどんな気持ちだったのだろう。 <p><補助発問></p> <ul style="list-style-type: none"> ・そういう気持ちのぼくをどう思うか。 <p>3 後半資料を読んで、ぼくが「はっとした」気持ちを話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <input type="text"/> に入る言葉は何だろう。 <p>・ぼくが「はっとした」のはなぜだろう。</p> <p>4 続きの生徒作文を読む。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ぼくにできることだったらしてあげたい。 ・自分も人の役に立ちたい。 <ul style="list-style-type: none"> ・えらい。立派だ。 ・「人助けをしてあげよう」という気持ちで行ったなら仮設住宅の方々に失礼ではないか。何かしてあげたいという気持ちは、自然とわくものではないか。 <ul style="list-style-type: none"> ・自分の方が元気をもらうもの。 ・してあげるよりことよりもらうものが多い。 <ul style="list-style-type: none"> ・人助けと思っていたが、自分が力を与えられていたことに気付いたから。 ・やりがいや喜びをもらっていたことに気付いたから。 	<ul style="list-style-type: none"> ・主人公に前向きな気持ちに共感させる。 <ul style="list-style-type: none"> ・後半につなげる補助発問をする。 ・多様な考え方があることに気付かせる。 ・生徒の方から出なければ、「こんな考え方も・・・」と教師が提示する。 <ul style="list-style-type: none"> ・空欄の言葉を考える中で、このような意見が生徒から出たならば、あえて発問しなくてもよい。
<p>終 末 1 0 分</p>	<p>5 旭市の現状を伝える写真を提示する。</p> <p>6 今日の授業を通して感じたことや考えを書く。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えや感想を書く時間を十分にとる。

(5) 他の教育活動との関連

- ・総合的な学習の時間や特別活動・生徒会活動のボランティア活動と関連させて扱うようにする。

2 本事例の活用に関する留意点

県内には多くの被災地があるため、資料（特に写真）の提示の仕方には配慮する。資料の話をより身近に感じ、ボランティアに対する実践意欲を高めるために、地域の実情に応じた写真に差し替えたり、「続きの生徒作文」は、実際に被災地ボランティアに携わったゲストティーチャーの話を聞かせることも考えられる。

3 道徳教材（素材について）

対 象	中学校
主 題 名	奉仕の精神
ね ら い	奉仕の精神をもって自ら進んでそれを実践しようとする態度を育てる。
学 習 活 動	<ul style="list-style-type: none"> ○ 津波によって破壊された飯岡地区の写真を見て津波によって家が壊れてしまった人たちの気持ちを考える。 ○ 前半資料を読み、ぼくが参加しようと思った気持ちを話し合う。 ○ 後半資料を読んで、ぼくが「はっとした」気持ちを話し合う。 ○ 今日の授業を通して感じたことや考えを書く。
<p>【素 材】</p> <p><前半資料></p> <p>ぼくたちの住む千葉県旭市飯岡地区は漁業と観光に栄え、「光と風の街」と呼ばれていた。そんなぼくたちの街を3月11日大津波が襲った。高さ7メートルにも及ぶ大津波が押し寄せ、海に面した飯岡地区は一気に波に飲み込まれ、一瞬にしてがれきの山になってしまった。コンクリート製の遊歩道はくだけ、家々はペしゃんこに押しつぶされ、漁船は打ち上げられ、遊歩道に面した家の屋根や自家用車が何メートルも先まで流されている風景があちこちに横たわっていた。</p> <p>様々な人たちの力で、壊れた建物は少しずつ片付けられ始めていた。ある日、ぼくが登校すると教室で、友達が「仮設住宅の方々が、夏の暑さで困っているということをお聞きしました。だから、私たちがゴーヤを植え、グリーンカーテンを作りたいと思います。」とみんなに呼びかけていた。ぼくも、「何か人助けがしたい」と思っていたので、すぐに参加することを伝えた。</p> <p><後半資料></p> <p>日差しが照りつける中、ぼくたちはゴーヤを植えた。汗が額ににじみ、のどが渴いてきても誰も文句も言わずに取り組んでいた。</p> <p>しばらくすると仮設住宅に住むおばあちゃんが、「ありがとう。すまないね。ご苦労様。暑いのに大変だね。」と言って僕たちに麦茶を持ってきてくれた。おばあちゃんは笑顔でぼくたちに話しかけてくれた。あの日、家が流されどんなに悲しかったか、自分や家族の命が助かったことがどんなにうれしかったかなど次々に話し始めた。</p> <p>そして、作業も終わりになり、帰り際にさっきのおばあちゃんが、「ゴーヤが大きくなって食べられるようになったら、ゴーヤ料理の作り方を教えるから、またおいで。」と語りかけてきた。</p> <p>友達が「おばあちゃん笑顔から元気をもらい、ゴーヤ料理まで教えてもらうなんて、わたしたちの方がいろいろしてもらっているね。」</p>	

「ボランティアって [] 」。と言った。ぼくはその言葉を聞いてはっとした。

<生徒作文>

ぼくが仮設住宅のグリーンカーテン作りに参加したのは、被災した方々のために「何かしてあげられることはないか、役に立ちたい」と思っていたからだった。ゴーヤを植えている最中に、仮設住宅に住む方々は、自分たちの家が流されつぶされ、悲しい思いをしているのに「ありがとう、すまないね。ご苦労様」とぼくたちを気遣ってくださっていた。ぼくも人の役に立てたのがうれしかった。力になれた気がした。人助けができたと思った。

しかし、被災された方々はどんなに悲しく、大変だったに違いないのに話しをしていくうちに、笑顔をもらい自分が励まされていることに気がついた。人助けと思っていたのはぼくの勘違いで、ぼくが力をもらっていたのだった。ぼくにやりがいを与えてくれ、何か行動する力を与えてくれたことに気がついた。

グリーンカーテンを通して仮設住宅の方々との絆をぼくは感じた。グリーンカーテンをかけたから終わりではなく、これからも時々、ゴーヤに追肥をするために仮設住宅に伺い、コミュニケーションを深めていきたいと思っている。ボランティアとは決して上から目線で「手助けをする」ものではなく、「人と人とのつながり」であり、「させていただくもの」なのだと思った。

これからも自分ができることから始め、絆・つながりを深めていきたい。

視点4 内容項目・公正・公平 (内容項目番号 4-(3))
資料名 点字ブロック (自作資料)

1 学習指導案

中学校 道徳学習指導案

(1) 主題名

公正・公平

(2) ねらい

現実の社会がもつ矛盾や課題に気づき、公のことで自分とのかかわりや社会の中における自分の立場に目を向け、社会をよりよくしていこうとする気持ちを大切にすることができる。

(3) 主題設定の理由

東日本大震災では、地震や津波による直接的な被害もさることながら、原子力発電所の事故による転居や転校など、生活様式を根本から変えざるを得なくなった方々も大勢生まれた。こうした被災者の方々へのボランティア活動や受け入れ体制が、各自治体や有志の方々によって整う一方で、実際に転校した児童が転校先でいじめられたり、不必要な物資を被災地に送りつけたりといったことなどもマスコミ等で大きく報道された。

転校生に対していじめる等の行為は言い訳の余地もないが、いわゆる「ありがた迷惑」と呼ばれるようなボランティア活動などは、本人が「よかれ」と思って行っている分、特に始末が悪い。かといって、一概にボランティア活動を行っていること自体をとがめるのは、筋違いである。ここでは、自己中心的な考え方や行動から脱却して、公のことで自分とのかかわりや社会の中における自分の立場に目を向け、社会をよりよくしようとする気持ちを育てていきたい。

本資料は、ある駅前周辺の歩道の設計を委託された若きデザイナー鈴木さんが、視覚障害者誘導用ブロック(点字ブロック)の設置の仕方をめぐって、先輩のデザイナー佐藤さんから何度もやり直しを命ぜられるという内容である。なんとか景観を優先させようとする鈴木さんに、佐藤さんからダメが出されるたびに、生徒は鈴木さんと自分自身とを重ね合わせながら、社会的弱者の存在に気づき、日常生活における差別や偏見等に目を向けていくことだろう。さらに、東日本大震災の被災者に対する自分たちの言動について振り返ることをねらって、本主題を設定した。

(4) 展開

	学習活動と主な発問	予想される反応	教師の支援
導入 10分	1 他人に対して、自分が手を貸した経験や貸してもらった経験を想起し、エピソード等を話し合う。 ○身の回りにいる人など、誰かのために何かをしたり、してもらったりしたことがありますか。	<ul style="list-style-type: none"> ・募金をしたことがある。 ・ボランティア活動に参加したことがある。 ・家で手伝いをしている。 ・友達に授業で分からないところを教えてもらった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の実態に応じて、東日本大震災に伴い、自分がしたり、されたりしたことを想起させる。 ・その時の気持ちなどについても想起させ、共有する。

<p>展開 30分</p>	<p>2 資料「点字ブロック①」の佐藤さんと鈴木さんのやりとりについて、話し合う。 ○自分が鈴木さんだったら、佐藤さんの言葉に対してどう対応しますか。</p> <p>3 資料「点字ブロック②」を読み、佐藤さんの指摘した箇所の何が問題だったのかについて話し合う。 ○佐藤さんは、この設計図の何が問題だと言おうとしたのでしょうか。</p>  <p>※設計図イメージ（例）</p> <p>4 資料「点字ブロック③」を読み、感想を交流する。 ○鈴木さんは、今後どういうことに気がつけたデザインをしたいと思いますか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・景観を壊さないように、色は変えずに形を大きくして分かるようにする。 ・目の不自由な方のために、景観などは無視して、点字ブロックをつくる。 など ・エレベーターから降りようとした時に、目の不自由な方が警告ブロックに気付いて立ち止まってしまう。 ・どこがエレベーターの入り口だかが分かりにくい。 ・車いすの人にとって、乗りづらい。 など ・様々な立場の身になって、誰もが幸せになれるようなデザインを考えるとと思う。 ・ユニバーサルデザイナーを目指すと思う。 など 	<ul style="list-style-type: none"> ・点字ブロックとはどういうものか等、生徒の実態に応じて、補足説明をする。 ・友達の見解を聞いて、納得したことなどについて感想を交流させる。 ・「佐藤さん」役と「鈴木さん」役に分かれ、佐藤さんが言おうとしていた言葉とそれを受け止める鈴木さんの言葉をロールプレイングさせる。 ・いくつかの問題点が指摘された段階で、改善策についても話し合わせる。 ・実態に応じて、「視覚障害者用ブロックの適正な設置のためのガイドブック」等を活用して、類似する身近な例を想起させる。
<p>終末 10分</p>	<p>5 自分の学校生活や家庭生活を振り返り、「誰かの役に立つとはどういうことか」について考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な立場の人たちの置かれている状況について、もっと知った上で行動しなければならない。 など 	<ul style="list-style-type: none"> ・「千葉県福祉のまち条例のあらまし」を参考にさせながら、千葉県の取組と自分自身の行動を重ねて振り返らせる。

(5) 他の教育活動との関連

- ・学校内にある施設に目を向けさせ、本時で考えたことを想起させる。
- ・学級内の係や、委員会活動等において、自分が「よかれ」と思って行っている活動が、本当に役に立っているのかどうかについて話し合わせる。

2 道徳教材（素材について）

対 象	中学生
主 題 名	公正・公平
ね ら い	現実の社会がもつ矛盾や課題に気付き、公のことで自分とのかかわりや社会の中における自分の立場に目を向け、社会をよりよくしていこうとする気持ちを大切にすることができる。
学習活動	資料を場面ごとに区切りながら読み、主人公の気持ちを想像しながら、差別について話し合いを深める。
<p>【素材】</p> <p>〈資料①〉</p> <p>新進気鋭の若手デザイナーである鈴木さんは、これまでの斬新なデザインが認められ、今回〇〇駅の周りの大幅改装工事に伴い、そのデザインを一手に引き受けることになった。鈴木さんにとっては、初めての大口の依頼であり、いつも以上に納得のいくデザインが出来上がった。</p> <p>そんなある日、鈴木さんの設計図を見た先輩デザイナーの佐藤さんから、「点字ブロックの色と形が気になる」という電話がかかってくる。佐藤さんは、鈴木さんが普段から尊敬する実力のあるデザイナーである。点字ブロックについては、県の条例で設置することが定められており、鈴木さんもその条例に従って、適切な場所に設置したはずであった。佐藤さんは、「この色と形では、弱視の方は点字ブロックがあることにさえ気付かない。もっと目立つように大きな黄色のブロックにしなければ」と言う。それを聞いて、鈴木さんは「それでは景観が損なわれてしまう」と反論を試みるが歯切れが悪いまま、電話が切れる。</p> <p>〈資料②〉</p> <p>佐藤さんの言葉が気になった鈴木さんは、「誘導ブロック」や「警告ブロック」などの規定等を改めて調べ、景観よりも実用性を重視しようと色も形も変えた目立つ点字ブロックで設計をし直した。再度、佐藤さんに送ると、今度は「よくなったと思うけれど、エレベーターの前の点字ブロックについては、問題があるのでは」という電話がかかってくるが、途中で切れてしまう。その真意を確かめるために何度もかけ直すが、佐藤さんは遠い場所に出張していて、つながらない。すでに時間もないために、鈴木さんは引かかるものを感じながら、そのまま設計図を業者に提出してしまう。</p> <p>〈資料③〉</p> <p>鈴木さんのデザインした設計図どおり、工事は進められる。完成してみると、評判は上々であった。この仕事を契機に、さらに注文が増えてくるようになり、鈴木さんは忙しい毎日を送っていた。そんなある日、一通の手紙が届く。「エレベーターの前の点字ブロックが邪魔で、ベビーカーがなかなか出入りできないのです。先日、車椅子を使っている方も使いづらそうでした。なんとかならないでしょうか」というものだった。それを見て、鈴木さんはかつての佐藤さんの言葉を思い出す。「このことだったのか…」と。</p> <p>鈴木さんは、やりかけの仕事を見つめたまま、今後のデザインについて考えていた。</p>	

資料名 「いつまでも繋がらない母の携帯電話」

(出典 「震災で本当にあった泣ける話」 株式会社イーストプレス)

高等学校 道徳学習指導案

1 主題名

生命尊重の精神を育む

2 ねらい

災害にあった人々の思いや残された人々の思いを通して、かけがえのない「いのち」の存在に気付かせる。さらにこのことを通して、自分に与えられた「いのち」の意味について深く考え、自分は過去から現在までのすべての存在に支えられていることを自覚しながら生きていく態度を養う。

3 主題設定の理由

事実の持つ力は大きい。誰もが一読して、登場人物をおそった過酷な運命と深い悲しみを感得するであろう。高校生という発達段階にある生徒は、これまでの生活体験や学習を通して、生命の大切さを理解している。加えて本県はこの度の震災の被災県でもあり、家族・親類や知人・友人が命を落としたという生徒もいるはずである。「いちばん大切なものはなんですか」と問われた8歳の美咲が、「いのち」と記す様子から、生徒たちは生命のかけがえのなさを心で感じ取るに違いない。

しかし、美咲はなぜ、「ママ」ではなく、「いのち」と記したのか。この問いを生徒たちに投げかけることによって、授業の場で「いのち」に対する深い洞察と意見交換が行われることを期待する。

美咲が事実を受け入れ、落ち着いた生活を取り戻しつつあるのは、時間の経過によるものであるとも考えられるが、何百枚もの泥にまみれた家族の写真を見つけたことが契機になっている。自分が生まれる前の若々しい母や赤ちゃんの頃の自分、父、姉、兄、そして祖母。家族の思い出が詰まった宝物を丁寧に整理していく中で、8歳の美咲は確かな「いのち」のつながりを感じ取ったのではないだろうか。そして、自分に与えられた「いのち」の意味とその重さを知ったのではないだろうか。

「いのち」のかけがえのなさは自明の理である。この学習を通して、もう一步踏み込んで、自分に与えられた「いのち」の意味について深く考え、過去から現在までのすべての存在に支えられていることを自覚する心情を育みたいと考え本主題を設定した。

4 学習形態

意見交換及び、グループでの意見形成を行うため、4名のグループ学習の形態を取る。

5 教材

本文プリントワークシート

6 実施場面・授業者

ロングホームルーム・学級担任

7 展開

	学 習 活 動 と 主 な 発 問 等
導 入 5分	<p>【導入】 5分 教師の発問 「3月11日の震災後、自分の中で何か変わったことはありませんか。」 ○2、3名を指名して答えさせる。</p>
展 開 37分	<p>【教材を読む】 7分 ○静謐な雰囲気を読ませることを心がける。</p> <p>【自分の考えをまとめる】 10分 教師の発問（中心発問） <u>「美咲が、先生にいちばん大切なものはなんですかと問われ、「いのち」と答えたのはなぜだと思いますか。」</u> ○自分の考えをワークシートに書き込ませる。 ○グループ内での意見交換は行わせない。 ○机間指導し、どのような意見があるかを確認する。</p> <p>○頃合いを見て、考えるヒントを2点板書する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: fit-content;">「ママ」ではなく「いのち」としたこと</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: fit-content;">泥まみれの家族の写真を見つけ、整理したということとの関連</div> <p>【考えを伝え合う】 15分 教師の指示 「グループ内で自分の考えを発表し、班内で意見交換をしてください。」 ○適宜、机間指導を行う。</p> <p>【自分の意見を発表する・級友の意見に耳を傾ける】 5分 教師の指示 「班内で伝え合いをした後の、自分の考えを発表してください。」 ○4名程度を指名する。</p>
終 末 8分	<p>【まとめ】 8分 ○生徒の意見を踏まえ、授業をまとめる。</p> <p>○ワークシートに授業の感想を書かせて回収する。</p>

いつまでも繋がらない母の携帯電話

「震災で本当にあった泣ける話」株式会社イーストプレス

祖母、母、子供3人の幸せな生活 あの日を境に母だけが消えた

震災前は宮城県名取市に住んでいた67歳の花岡恵子さんと3人の孫は、現在仙台市内の親戚の家に身を寄せている。名取といえは、津波によって街全体が壊滅された場所である。震災前は恵子さんと、38歳の紗恵子さん。そしてその子供である14歳の直也くん、12歳の沙奈ちゃん、9歳の美咲ちゃんの4人暮らしだった。お父さんを病気で亡くした子供たちは、それでも元気に暮らしていた。そんな平和な一家から、大津波は幸せを剥ぎとっていった。

恵子さんと3人の孫はなんとか無事だったが、紗恵子さんは未だ行方不明のまま。避難所で暮らしていたころは、同じ被災者によく言われた。

「けっきょく両親とも亡くしてしまうことになって、3人は大丈夫かね」

「まだ母親は亡くなったわけではないよ。行方不明なだけさ」

恵子さんはそんなふうに答えただけ、心の内側ではやっぱり無理だろうと思っている。

「上の二人はなんとなくねえ、理解してるんだけど……」

親しい人と顔を合わせるごとに愚痴がでる。

「9歳の美咲がねえ……」

教育方針として、3人の孫には携帯電話を持たせていなかった花岡家。昼間働きに出ている母親と連絡をとるとき、子供たちは、「おばあちゃん、電話かして」と恵子さんの携帯電話から連絡をしていた。

震災後、しばらくは「お母さん、どこにいるのかな」などと、無邪気に話していた孫たちだが、10日もするといっさい口にしなくなった。昼間は元気に遊んでいる子供たちも、夜になると母親のいない寂しさから泣き続けることもあった。上の二人は「お母さんはもうこの世にいないのだろう」と悟っているようだった。でも9歳の美咲ちゃんだけは決して涙を見せなかった。気丈に耐えている……というのではない。母の無事を信じているのだ。

美咲ちゃんは夕方になると必ず恵子さんの携帯電話を持って一人おもてに行く。恵子さんは気になって後をつけたことがある。美咲ちゃんは避難所となっている小学校から、少し離れた場所にある高台に行って電話をかけていた。

「もしもし、ママ元気ですか？」

繋がらない携帯に言葉を吹き込む次女。被災地ではまだまだ携帯電話の電波状況が悪く、街の高台に行かなければ繋がらない。美咲ちゃんが向かった場所は近隣でも唯一なんとか電波をとらえることができるスポットだった。いつ行っても携帯を持った人たちが何人かいる。美咲ちゃんはそこに着くと、折りたたみ式の携帯電話を開けて母親に電話をしていたのだ。もちろん、「おかけになった電話番号は、現在電波の届かない場所か、電源が入っておりません」というメッセージが流れるばかり。それでも美咲ちゃんは母親への言葉を吹き込んでいた。

「もしもし、美咲です。ママ、元気ですか。美咲は元気です。早く帰ってきてね」

そう言うと少し安心するのか、美咲ちゃんは携帯電話を閉じて小学校にもどって行く。そんな孫の姿を見ても何もしてやることができない。恵子さんは津波を心から憎んだ。

ある日、避難所で生活している孫たちの会話を聞いて恵子さんはまた胸が痛んだ。

「ねえお兄ちゃん、電波の通じない場所ってどこ？」

「さあ、地下とかかな？」

「天国じゃないよね」

「なに言ってるの美咲？」

姉の沙奈ちゃんが不思議そうな顔をした。恵子さんだけは美咲ちゃんの質問の真意を理解することができた。美咲は携帯電話から流れる「電波の通じない場所か電源が……」のメッセージのことを言っているのだ。でも何も言ってあげることができなかった。

瓦礫から見つかった泥にまみれた家族の思い出

震災直後、被災現場に多くの自衛隊員が入った。最初の数日は死体の処理が主な仕事だったと言えよう。次に道をふさいだ瓦礫などの処理。その際、ぐしゃぐしゃに破壊された家屋の残骸などは重機で処理していくが、持ち主のはっきりしない個人の品々はそれ以上傷つかないように、一つひとつ手で拾い集めて、保管されていった。ランドセル、体育館シューズ、金庫、アルバム、携帯電話……ありとあらゆる「誰かの大切なもの」を自衛隊員たちは分類整理していた。

3月11日から数週間経過し、被災した方々も少し落ち着きを取り戻し始めたころ、このような各家庭の流失品を学校の体育館や公民館などで公開するようになった。街の人たちはそれらの場所を見て回り、自分や家族のものを探るのである。そんな中から、恵子さんと3人の孫は宝物を発見したのだった。

「最初は夢かと思った」

それは何百枚という写真だった。津波に飲まれ。泥まみれ。水に濡れているからフニャフニャの状態だったが、それでも写真はきれいだった。重なったままで乾いたからだろう。写真と写真がぴったりと貼りついて、引き剥がそうとすると破れてしまうものもあった。近所の写真屋の店主が、「水に戻していったんふやかせばきれいにはがれるよ」と教えてくれた。

3人の孫たちは、バケツに水をいっぱい入れてきて、泥に汚れた写真、ベコベコになった写真、重なり合って貼り合わさってしまった写真を丁寧に洗い始めた。一枚一枚、洗っては干し、洗っては干し……。大人が手伝おうとしても孫たちは「自分でやるから大丈夫」と触らせなかった。写真は全部で二百枚以上あった。中には紗恵子さんの結婚式の写真や成人式の写真も。

「うちの孫たちだけがつらいんじゃないんだ」

前述したように、3人の孫と恵子さんは、現在仙台市の親戚の家に住んでいる。そこから学校に通う子供たち。

9歳の美咲ちゃんの勉強机の前にはお母さんの成人式の写真が飾られている。

「私も20歳になったらこんなふうにかいになるかなあ」

ときどきそんなことを言う。

この写真が見つかったから、美咲ちゃんはお母さんに電話をすることがなくなった。心の中でひとつのくぎりがついたのかもしれない。でももちろん、悲しみが完全に癒されたわけではない。

最近新しく通い始めた小学校で、授業参観が行われた。母親の代わりに見に行った恵子さん。教室には恵子さんと同じような事情を抱えた保護者が何人かいた。

「うちの孫たちだけがつらいんじゃないんだ」

東北が抱えている悲しみの総体はいったいどれほどのものなのだろう。考えてもせんないことだが……やはりそこに気持ちがおよんでしまう。

先生が生徒たちに向かって質問した。

「みなさんのいちばん大切なものは？ 思いついたものをこの紙に書いてください」

小さなプリントが配られた。後ろから覗いてみると、「ゲーム」、「おもちゃ」などと書く子供が多い中、美咲ちゃんだけは、

「いのち」

と書いていた。

美咲ちゃんのいちばん大切なものを津波はたくさん奪っていった。お母さんはまだ行方不明のまま。でも孫たちの心の中ではお母さんは、「いのち」をもって生きてほしい。恵さんはそう祈るばかりだ。

道徳・『いつまでも繋がらない母の携帯電話』 ワークシート

平成23年〇月〇日（〇）・第〇限実施

- 1 3月11日の震災後、自分の中で何か変わったことはありませんか。

- 2 美咲が、先生に「いちばん大切なものはなんですか」と問われ、「いのち」と書いたのはなぜだと思いますか。

- 3 今日の授業を通して感じたことや考えたことを感想を自由に記してください。

年 組 番 氏名
